2012年（平成24年）4月5日 木曜日
京都新聞

大津の中2 いじめで自殺

真相解明は法廷に

遺影の中の息子は優しくほほ笑んでいる。父親（46）は「息子は今も生きている。家族みんながそう思っている。そう思わないとても耐えられない」と絞り出すように話した。

大津市の中学2年の男子生徒＝当時（13）＝は昨年10月11日朝、自宅マンション14階から飛び降り自殺した。

「いじめがあった」。学校には直後からこうした指摘が生徒や父親からあった。学校が全校生徒にアンケートを実施した結果、いじめの事実が判明した。

その後、父親は何度も学校に出向いて真相解明を求めた。だが学校側は「確証が得られない」と調査を打ち切った。

父親は「自殺の予兆はあった。学校や現場の教師がきちんと対応してくれていたら息子は死ななかった」と悔やむ。

父親は2月下旬、いじめにかかわったとされる生徒3人と保護者、大津市を相手取り損害賠償を求める訴えを大津地裁に起こした。息子に何が起きていたのか。法廷で明らかになることを願っている。

（岡田幸治）

＝26面に続く

近江 脈々

「いじめ」大津・中2男子自殺

父「予兆伝えてくれれば」

1面から続く

「あれって、いじめちゃうん？」。昨年9月下旬、男子生徒の担任は廊下で同級生の女子生徒がこう話すのを耳にした。男子生徒のことを指していると担任は思ったという。

担任、気付くも…

放課後、担任が男子生徒に「ひどいことされていないか？」と聞くと生徒は「大丈夫」と答えた。それ以上の調査は行われず、結果的にいじめは見過ごされた。

父親は「いじめられていることを自分から言う子どもはいない」と憤る。

大津市教委の発表では、男子生徒は9月以降、数人の同級生から校内で繰り返し殴られたり、死んだ蜂を食べさせられそうになるなどの嫌がらせを受けていた。

父親も独自に複数の同級生らに聞き取り調査をした。ほとんどの生徒がいじめに気づいており、「担任や他の先生も見ていた」と話した。父親は「担任が見聞きした情報を校内で話し合い、わずかなことでも親に伝えておいてくれたら息子は救われたかもしれない」と悔やむ。

学校によると、毎朝、校長や教頭ら全教職員の前で前日に気になることがあれば各学年の指導教員が報告するという。しかし、男子生徒へのいじめの報告はなく、仕組みは機能しなかった。

「誤解避けるため」

そもそも、いじめの予兆の段階で保護者に伝わる仕組みになっていなかった。

学校は「誤解を招くため、いじめと確実に判断できるまでは保護者には伝えない」という。

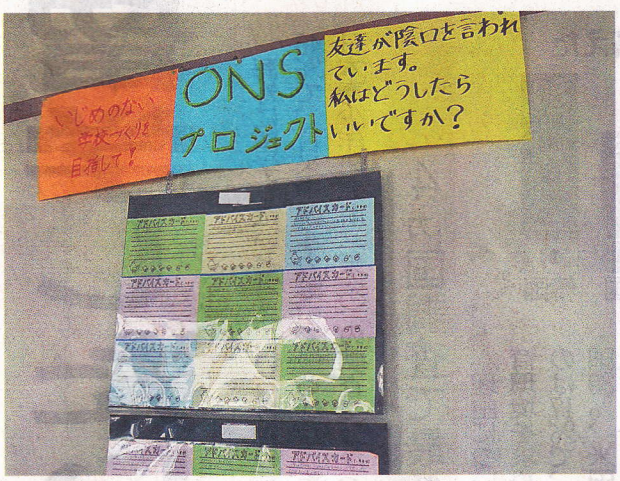
文科省によると、全国の国公私立の小中高校などがいじめは、7万7630件で、2010年度に把握したいじめは、前年度より6・7％増えた。県教委によると、県内では前年比15件増の215件だった。

いじめ防止に取り組むNPO「いじめから子供を守ろう！ネットワーク」（東京都）の井澤一明代表（53）は「いじめは話し合いでは止められない。予兆を見逃さず教員や保護者が行動することが大事」と言い切る。

同ネットは独自の「いじめ解決プロセス」を提唱。保護者らがいじめの事実を記録し、学校に再発防止策を作成してもらうまでの5段階が必要と指摘している。

（岡田幸治）

近江 脈々



男子生徒が通っていた中学校では男子生徒の自殺後、生徒会が中心となり、いじめ防止を呼び掛けている。生徒会が出した課題に対し、生徒が考えた「そばにいる友達が励まし、力になる」「先生に伝える」などの答えが下がっている（大津市内）

いじめから子供を守ろう！ネットワークが提唱

いじめ解決プロセス

1. いじめの被害事実を記録
2. いじめの事実を訴え、担任に相談
3. 校長を交えて相談
4. 加害者に謝罪させる
5. 学校に再発防止策を作成させる

学校に報告の仕組みなく